平成二十七年三月期
関西大学審査学位論文

関西大学大学院・文学研究科・二〇一四年度

奉納百首の表現史

福留　瑞美

俊成から始まった堀河題による独詠型奉納百首、主に『俊成五社百首』『為家七社百首』『阿仏五百首和歌』を中心に、その特徴を明らかにすることを目的としている。

序章「百首歌の流れ――平安中期から鎌倉後期まで」において、初期百首から堀河百首への流れと堀河百首以降の展開を見ていくことで、俊成が始めた堀河題による独詠型奉納百首の位置づけを試みた。

第一章『俊成五社百首』では、漢籍の影響と先行歌（万葉語・難儀語など）の影響を中心に、集大成的な俊成歌学というべき作品であることを確認し、家隆など近年の作品にも『五社百首』が摂取されていることから、奉納という宗教的な行為から、歌人の詠歌の手本へとその役割が変化したことを示した。

第二章『為家七社百首』では、漢籍の影響と先行歌（俊成・定家詠）の影響を中心に、俊成詠や定家詠の影響を確認し、中でも『俊成五社百首』における俊成の和歌活動になぞらえようとした意図が、構成・形式・歌題・奉納方法・和歌内容などからも見ることができるということを示した。

第三章『阿仏五百首和歌』では、成立までの背景、表現上の特徴（漢籍と先行歌、主に為家詠の影響）を確認し、訴訟のための鎌倉下向の旅や為家譲状などを意識した和歌表現があることを示した。

第四章「比較から見る各社奉納百首の特徴」では、『俊成五社百首』『為家七社百首』『阿仏五百首和歌』の各社への百首を、奉納先が一致するものを比較することで、その特徴を明らかにしようとした。「賀茂社奉納百首」「日吉社奉納百首」などを通して、俊成の百首は神意に配慮しつつ神社周辺や無関係な地名を詠んだ「普遍的情景描写型」（当たり障りがない詠み方）であり、為家の百首は神社の様子やその周辺地域の情景を詠むという「神祇的情景描写型」（神社や巫女などの様子を具体的に描くこと、いわゆる社頭の年中行事のように詠むことが主眼）であり、阿仏尼の百首は強い旅人意識から四季の移り変わりに託して自分自身の心情を詠み入れるという「述懐重視型」であることを示した。

終章「奉納百首の性格」では、歌が詠まれた「場」ということに注目して分類を試み、『俊成五社百首』『為家七社百首』『阿仏五百首和歌』の特徴を再確認した。